



なつかしの名画劇場

9/5日6月

入場 午前 8時15分 上映 午前 9時00分

入場料 - 2日間出入り自由・当回座席指定 -

一般

シニア割 (70歳以上)

500円

300円

※ シニア割をご利用の方は、生年月日を確認できる物(免許証など)をご持参ください。

9/5(日)

- ① 本日休診 9:00 ~
- ② 幕末太陽傳 11:00 ~
- ③ 貸間あり 13:30 ~
- ④ 喜劇 女は男のふるさとヨ 15:40 ~

9/6(月)

- ① 喜劇 女は男のふるさとヨ 9:00 ~
- ② 貸間あり 10:50 ~
- ③ 幕末太陽傳 13:25 ~
- ④ 本日休診 15:30 ~

※ 各上映後およそ20分間、換気・消毒作業を行います。ご理解、ご協力をお願い致します。

チケット発売 7月17日(土) 9時~

【お問い合わせ】 門川町総合文化会館 0982-63-0002

※ 新型コロナウイルス感染拡大防止の為、座席の配置や鑑賞方法等に制限があります。ルールや制限を守って、お楽しみください。

本日休診 (1952年)



(白黒 / スタンダード / モノラル / 97分)

幕末太陽傳 (1957年)



(白黒 / スタンダード / モノラル / 110分)

さまざまな笑いで見るものを楽しませてきた喜劇映画の代表作を上映

貸間あり (1959年)



(白黒 / シネマスコープ / モノラル / 112分)

喜劇 女は男のふるさとヨ (1971年)



(カラー / シネマスコープ / モノラル / 90分)



上映作品のご紹介



本日休診 (1952年)

(白黒 / スタッフード / モノラル / 97分)

井伏鱒二の同名小説と「暹羅隊長」の二つの短篇をもとに、ベテランの斎藤良輔がシナリオを書いた風俗喜劇。ある町の老医師・三雲八春は、院長を甥の伍助に譲って一年目。今日は本日休診の札を掲げて、院長を始め看護婦たちを慰安旅行に出してやった。そんな居残りの彼のもとに、次から次へと突飛な事件が舞い込んでくる。新人・三国連太郎が演じた、戦地で頭に負傷したことから発作的に軍隊時代に逆戻りする青年の姿は、見るものに強い印象を残す。監督の渋谷実、松竹で成瀬巳喜男や五所平之助らの助監督を務め、戦後獅子文六原作の風俗喜劇で監督としての地位を確立、『現代人』(1952)など社会派ドラマでも知られる。ドライな感覚に鋭い風刺を盛り込んだ作風は、この群像喜劇にも存分に活かされている。「キネマ旬報」ベストテン第3位。



幕末太陽傳 (1957年)

(白黒 / スタッフード / モノラル / 110分)

金もないのに品川遊廓でお大尽遊び、やむなく居残りとなったが遊廓の人気者として要領よく生きてゆく男の姿を描いた時代劇コメディ。その物語の核となったのは「居残り佐平次」をはじめ「芝浜の革財布」や「品川心中」といった古典落語ネタである。監督の川島雄三は、この他にも『愛のお荷物』(1955)や『貸間あり』(1959)といったテンポのいい喜劇を連発したが、演出家としての幅は広く、男女関係のもつれをめぐるメロドラマなどにも秀作を送り出した才人である。フランキー堺扮する居残り佐平次は、軽妙な味を見せながらも実は胸を病んでいるという設定であり、その姿には川島監督が一貫して作品に投影してきた底深い虚無を垣間見ることができる。また共演者として、日活のトップ・スターになる前の、時代劇初出演の石原裕次郎が、佐平次と同宿して一騒動を起こす勤皇の志士高杉晋作を若々しく演じている。「キネマ旬報」ベストテン第4位。



貸間あり (1959年)

(白黒 / シネマスコープ / モノラル / 112分)

45歳で世を去った川島雄三監督が晩年に籍を置いた東京映画時代の代表作であり、喜劇映画作家としての稀有な才能を存分に発揮した快作でもある。井伏鱒二の原作を、当時駆け出しのシナリオライターであった藤本義一と川島が奔放に脚色。遥か通天閣を見渡す大阪・天王寺の夕陽ヶ丘に立つ風変わりなアパートに暮らす、奇妙な住人たちの生態を、下品さと紙一重の人間臭い猥雑さのなかに描いている。何につけても器用で人から頼まれたら断れない性格、そのくせ素直になることを恥じて逃避してしまうフランキー堺演じるインテリの主人公は、まさに川島監督の自画像と言えるだろう。熟練のバイプレーヤーたちが、怒涛のように畳み掛けるアンサンブルも圧巻。この時代、川島監督とのコンビが多かった名手・岡崎宏三のカメラが、破天荒なドラマを端正な画面のなかに収めている。



喜劇 女は男のふるせとヨ (1971年)

(カラー / シネマスコープ / モノラル / 90分)

松竹の喜劇「女」シリーズの第1作。東京新宿でストリッパーを斡旋する芸能事務所には、身寄りがなく、貧しいけれども逞しいダンサーたちが、人情に厚い経営者夫婦の「家族」として住んでいた。ふとしたトラブルから旅回りを決意したダンサーと、彼女を真面目に慕うひとりのファンが、改造した自動車で日本列島を南へと向かう。この作品を演出した森崎東は、庶民の生活からにじみ出る人間臭いエネルギーを笑いととも描くことに優れた監督で、この映画の脚本は、松竹大船撮影所の先輩である山田洋次と組んで執筆した。このシリーズは、逆境にめげない逞しい女性像と不器用な生き方しかできない男性たちを対比させながら、こうした新しい「家族」の形を示すことで松竹ホームドラマの伝統を引き継いだとも言えるだろう。この映画のヒットに続いて『喜劇 女生きてます』(1971)や『喜劇 女売ります』(1972)などの力作を送り出している。

新型コロナウイルス感染拡大防止対策を実施致します。

当日は、新型コロナウイルス感染拡大防止対策を講じた上で、上映致します。ご理解と協力をお願い致します。

- 来館前に、ご自宅での検温をお願い致します。発熱や倦怠感など、体調の悪い方の来館はご遠慮ください。受付窓口でも検温致しますので、ご協力ください。また、来館の際にはマスクの着用をお願い致します。
- 各所、アルコール消毒をご用意しております。ご活用ください。
- 自由席ではありません。当日、受付窓口にてお座りになされる座席番号をお選びください。
- 各上映後、約20分間(昼休憩40分間)の消毒・換気作業を行います。ご協力をお願い致します。
- 各上映、客席の収容率約50%を目安に人数制限を行います。
- 今後の感染状況や感染対策によっては、公演が中止になる場合もあります。予め、ご理解下さい。